四国の匙・杓子形土製品

1、はじめに

今回の調査では、溝SD001と溝SD005から匙・杓子形土製品が計7個体出土した。これらの帰属時期は弥生時代中期中葉～終末のものと考えられる。特にSD005黒灰色土層中よりタイプの異なるものが5個体集中して出土したことは非常に注目された。そこで、ここでは四国四県出土の匙・杓子形土製品を集成し当遺跡出土資料について考察を試みてみたい。

まず、どうして「匙・杓子」と区別しているのかという理由であるが、この二者は似通ってはいるものの根本的に機能面では異なり、厳密な区別が必要であるとの考えからである。つまり、匙・杓子にはそれぞれ原型として木製品があり、両者の区別は木製品ではつきやすいものの、土製品になってしまうと見分けがつきにくくなるようである。この点から、木製品と土製品とを比較し、その原型を想定することによってはじめて土製品の機能的側面にアプローチすることが可能となると考える。この観点で、筆者はかつて近畿地方出土の匙・杓子を木製品と土製品について集め、まず木製品によって匙・杓子を分類し、この分類をもって土製品も分類し、木製品研究と土製品研究の連動作業を推進することを促したことがある（角南　1993)。ここでは、この方法を用いて四国出土の匙・杓子形土製品の類型化をおこない、それらの機能を推定してみようと思う。

2、匙・杓子の定義と分類

匙と杓子の定義・区分は前稿で提示したもので骨子に変化はない。つまり、匙とは容器中の食物・液体を直接口へと運ぶためのものであり、身の部分は紡錘形を呈するものである。杓子は食物・液体を容器へともしくは容器から容器へと移動するためのもので、直接人間の口につけることがないものであり、身の部分は円形である。

分類については一部考えを変えた所があり、新たな分類項目を設けたが基本的には前稿を踏襲するものである。以下、匙、杓子の分類基準を示す。匙と杓子の形態的な大別は身部に依る。身部が紡錘形を呈するものを匙、円形を呈するものを杓子とした。これをもとに主として柄部の取り付き方を主眼に置いて、匙・杓子をそれぞれA・B・C・Dの4類に大別した。更にこれをA類では2つに、B類では4つに、C類では2つに細別をした。

次に分類基準を明示する。Aa類は身部口縁部と柄部付け根の上面とがほぼ一直線をなし、頭部に比して柄部の長いもの。Ab類は身部口縁部と柄部の付け根の上面とがほぼ一直線をなし、頭部に比して柄部の短いもの。B-Ⅰa類は身部口縁部が柄部付け根の上面より一段高くつくられ、両者が鈍角をなして取り付き、頭部に比して柄部の長いもの。B-Ⅰb類は身部口縁部を柄部付け根の上面よりも一段高くつくり、両者が鈍角をなして取り付き、頭部に比して柄部の短いもの。B-Ⅱa類は身部口縁部と柄部付け根の上面との間に段差がなく、両者が鈍角をなしてとりつくもので、頭部に比して柄部の長いもの。B-Ⅱb類は身部口縁部と柄部付け根の上面との間に段差がなく、両者が鈍角をなして取り付くもので頭部に比して柄部の短いもの。B-Ⅲ類は山形に彎曲した柄部がとりつくもの。Ca類は身部口縁部に対して柄部が直角もしくは直角に近い角度で取り付き頭部に比して柄部の長いもの。Cb類は身部口縁部に対して柄部が直角もしくは直角に近い角度で取り付き頭部に比して柄部の短いもの。以上の6類に細別した。D類は舟形を呈する槽状の身に短い柄部が取り付くものである。また、柄部が欠損して長さが不明のものについてはAx類・B-Ⅰx類・B-Ⅱx類・B-Ⅲx類・Cx類とそれぞれした。木製品では杓子のA・B類は横杓子、C類は縦杓子とされるものである。

3、四国出土資料の事例検討

集成作業の結果をもとに、四国の匙・杓子形土製品について検討をおこなってみたい。資料は四国全土で18遺跡28例を確認したが、徳島県では事例が確認できなかった。これは、現在は出土していないだけで、今後資料が発見される可能性は高いだろう。

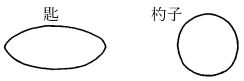
形態別では、匙は8個体、杓子は13個体ある。細別した結果は表の通りで、集計すると匙はA類5、B類1、D類2

四国出土の匙・杓子形土製品一覧

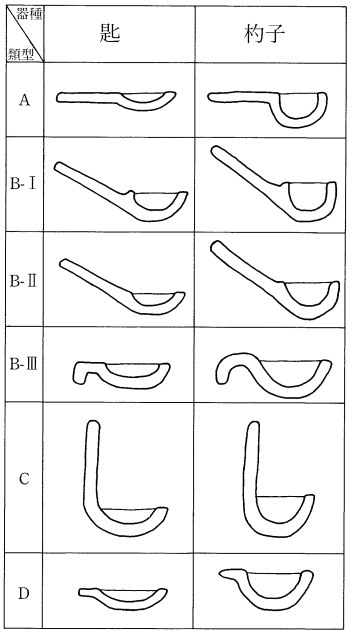
No.	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	器種	類型	文献
1	中間西井坪	香川県高松市	SX01	古墳・前	匙	D	大久保 1996
2	下川津	香川県坂出市	SDⅡ01	弥生・後	杓子	Aa	藤好ほか 1990
3	郡家原	香川県丸亀市	SD107	弥生・末～古墳・初	杓子	B-Ib	山下 1993
4	郡家原	香川県丸亀市	SD107	弥生・末～古墳・初	杓子	B-Ib	山下 1993
5	郡家原	香川県丸亀市	SD158	弥生・末～古墳・初	匙	Ax	山下 1993
6	旧練兵場	香川県善通寺市	SH-01	弥生・後	杓子	B-Ia	森下 1995
7	旧練兵場	香川県善通寺市	SD03	弥生・後	杓子	B-Ⅱa	西岡ほか 1998
8	旧練兵場	香川県善通寺市	SD001黒褐色層	弥生・後	杓子	B-Ia	本報告
9	旧練兵場	香川県善通寺市	SD005暗黒褐色層	弥生・中末～後初	杓子	B-Ⅱa	本報告
10	旧練兵場	香川県善通寺市	SD005黒灰色層	弥生・中・中～中・後	杓子	B-Ib	本報告
11	旧練兵場	香川県善通寺市	SD005黒灰色層	弥生・中・中～中・後			本報告
12	旧練兵場	香川県善通寺市	SD005黒灰色層	弥生・中・中～中・後	匙	Ax	本報告
13	旧練兵場	香川県善通寺市	SD005黒灰色層	弥生・中・中～中・後	杓子	B-Ix	本報告
14	旧練兵場	香川県善通寺市	SD005黒灰色層	弥生・中・中～中・後	杓子	Cb	本報告
15	稲木	香川県善通寺市	第5層	弥生・後～末	杓子	D	西岡ほか 1989
16	矢ノ塚	香川県善通寺市	SD85101	弥生・中・中～中・後	杓子	B-Ib	薦田ほか 1987
17	森広	香川県大川郡寒川町	SH-206	弥生・後・後			山本ほか 1997
18	鴨部・川田	香川県大川郡志度町	D区SH07	弥生・中・前	杓子	B-Ix	森 1997
19	中村	愛媛県松山市		弥生・後	杓子		松山市教委 1982
20	宮前川	愛媛県松山市	包含層	弥生・末～古墳・初	杓子	Ax	西尾・栗田 1987
21	宮前川	愛媛県松山市	包含層	弥生・末～古墳・初	杓子	B-Ib	西尾・栗田 1987
22	福音小学校構内	愛媛県松山市	土器溜り	弥生・後	匙	Bx	梅木ほか 1995
23	来住廃寺	愛媛県松山市	Ⅶ層		匙	D	梅木ほか 1993
24	西石井荒神堂	愛媛県松山市	DK1	弥生・末～古墳・初	匙	Ab	梅木ほか 1998
25	若草町	愛媛県松山市	SI-08	弥生・後・後	匙	Ax	土井・伊藤 1996
26	平田七反地	愛媛県松山市	d3区SD3	弥生・末～古墳・初	杓子	B-Ia	西川ほか 2000
27	犬塚	愛媛県越智郡玉川町		弥生・末～古墳・初	杓子	B-Ⅱb	正岡 1981
28	林田	高知県香美郡土佐山田町	ST-3	弥生・後	匙	B-Ix	森田 1985
29	西分増井	高知県吾川郡春野町	ST-11	弥生・後	匙	Aa	出原 1990

類型別出土点数

	Aa	Ab	Ac	B-Ⅰa	B-Ⅰb	B-Ⅰx	B-Ⅱa	B-Ⅱb	Cb	D	計
匙	1	1	3			1				2	8
杓子				3	4	2	2	1	1	1	15
計	2	1	3	3	4	3	2	1	1	3	23

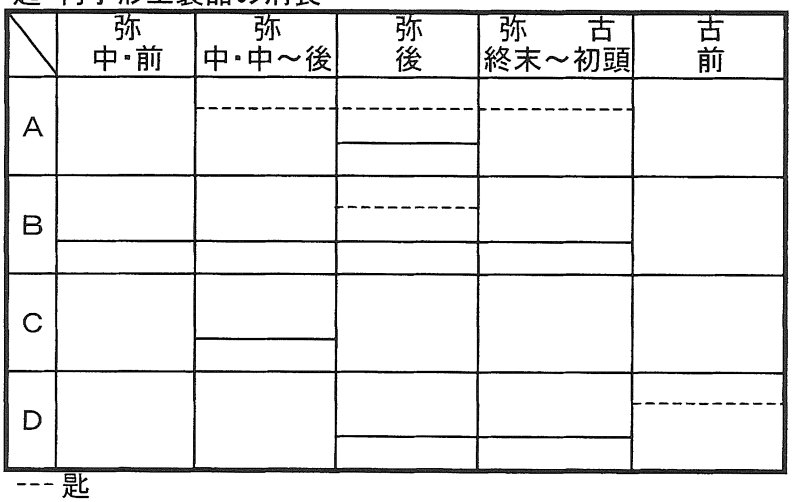


身部平面形態



匙・杓子の形態分類模式図

匙・杓子形土製品の消長



--- 匙
— 杓子

Fig.83　四国出土の匙・杓子形土製品の分析

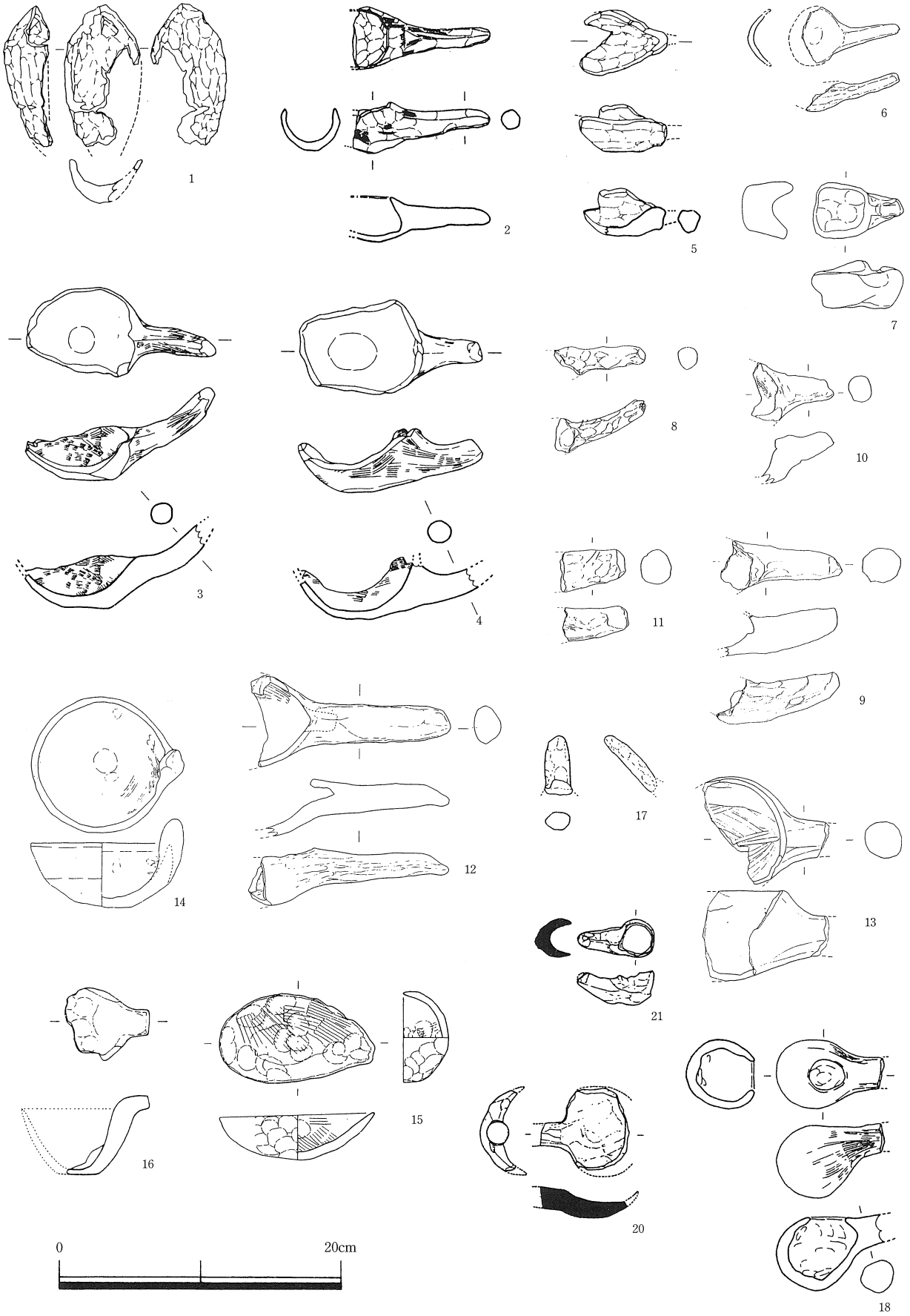
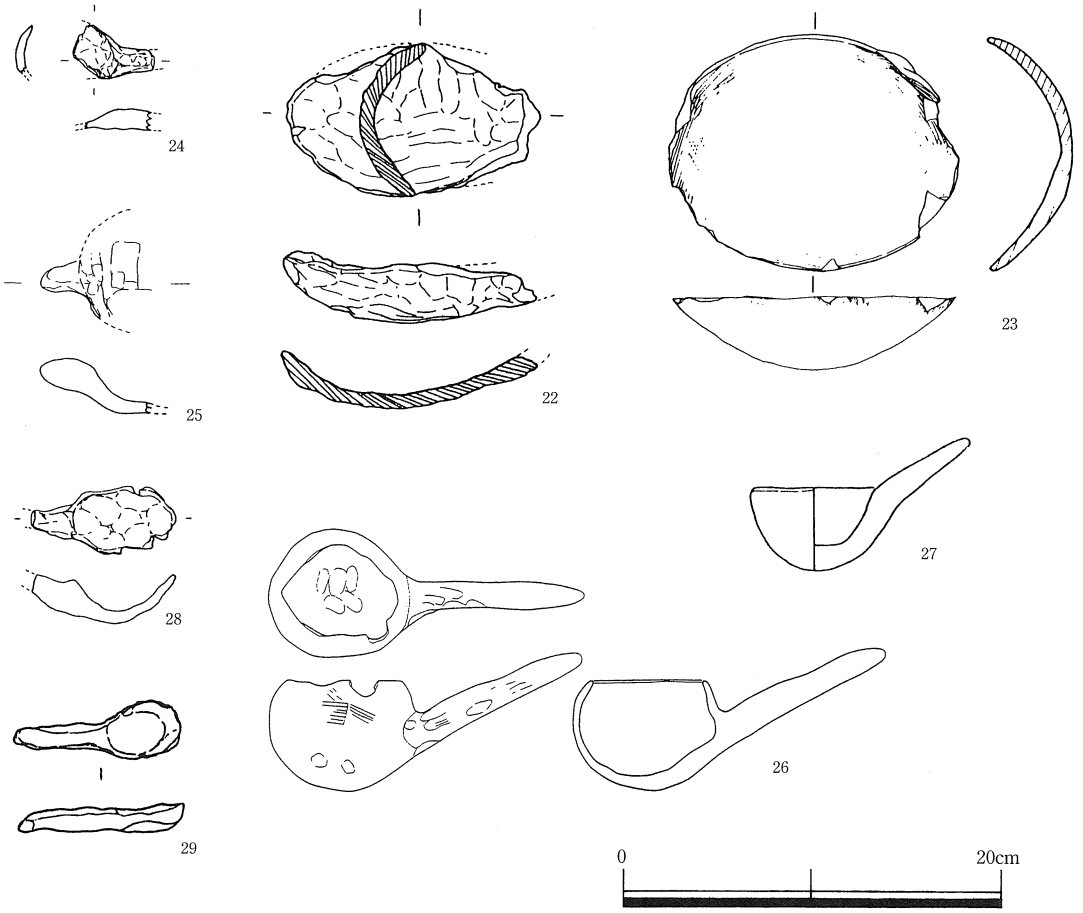
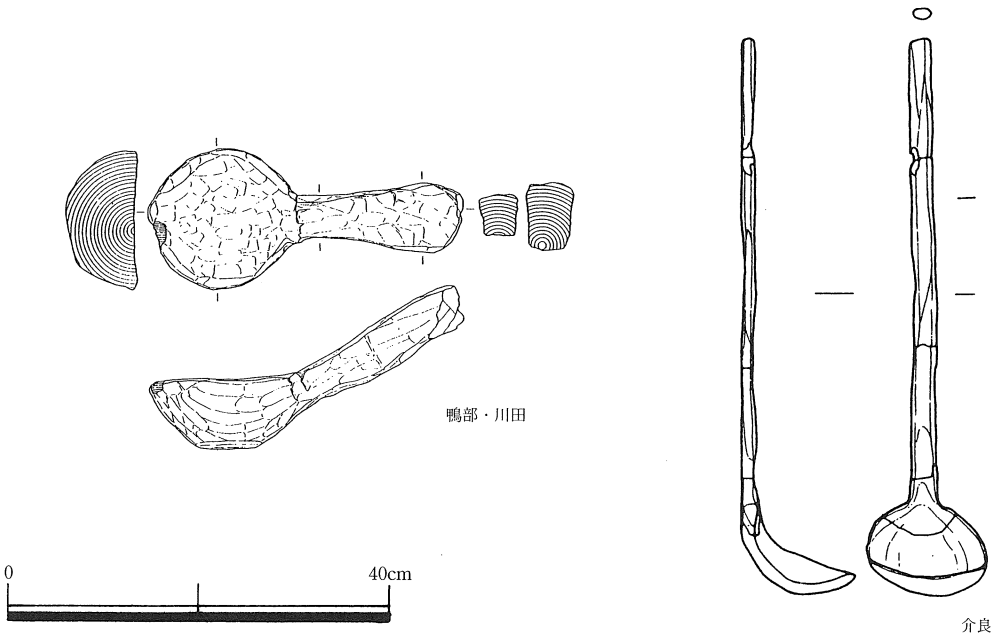


Fig.84　四国出土の匙・杓子形土製品1（1/4）



四国出土の匙・杓子形土製品2（1/4）



四国出土の杓子形木製品（1/8）

Fig.85　四国出土の匙・杓子

で、杓子はA類1、B類10、C類1、D類1となる。

土製品の消長時期を見ると、弥生時代中期前葉の志度町鴨部川田遺跡例が最も古い。その後中期中葉から資料は増加し、古墳時代前期にかけて一定数が出土している。A類について、匙は弥生時代中期中・後葉～弥生時代終末・古墳時代初頭まで継続する。杓子は弥生時代後期に見られる。B類について、匙は弥生時代後期に見られる。杓子は弥生時代中期前葉の鴨部川田遺跡例に始まり、弥生時代終末・古墳時代初頭まで継続する。C類は当遺跡出土資料の杓子が初出で、現在の所は1例しか存在していない。このため弥生時代中期段階にあることしか断定できない。D類について、匙は香川県高松市中間西井坪遺跡出土の古墳時代前期資料があるのみである。杓子は弥生時代後期～弥生時代終末・古墳時代初頭に資料が見られる。

出土遺構は溝か竪穴住居からの出土に占められている。当遺跡出土資料も集落の端に立地する溝からの出土であり、これまで想定されている出土状況と符合する（大野　1989）。

4、木製品・瓢箪との対応関係

次に四国出土の匙・杓子の木製品について管見に触れた事例を紹介してみる。資料は2例ある。香川県鴨部・川田遺跡環濠SD01からの出土資料は、弥生時代前期～中期のものと考えられる横杓子の未製品である。高知県高知市介良遺跡自然河川SRから縦杓子が一点出土している。遺物の時期は弥生時代後期～古墳時代前期が中心であり、杓子もその時期の所産と考えられる。しかし、現状では四国での木製の匙・杓子の出土はまだまだ少なく、土製品との関連を検討出来るには至っていないようである。

弥生時代前期以降の集落からに製品ではないが瓢箪が希に出土しており、古墳時代前期頃の集落からも瓢箪製柄杓が出土することなどより、瓢箪を用いた祭祀が執り行われたと考えられる（角南　2000）。大野薫が指摘した弥生時代前期になると、「球形袋状」のものが出現するという点に留意すると、四国で最古の資料である鴨部・川田遺跡例は「球形袋状」を呈しており、匙・杓子形土製品の性格は弥生時代前期に出現する「球形袋状」の原型と考えられる瓢箪に対する特別な観念・信仰をベースにしたものと考えられ（大野　1989）、実用品というよりも祭祀具であるという説に賛同したい。弥生時代前期以降には瓢箪形の壺が一定量存在することも関連がありそうだ。まず最初に瓢箪に対する特別なイメージがあり、それが匙・杓子へと拡大していったとも考えられる。

5、小結

以上見てきたことより当遺跡出土資料の評価をしておきたい。今回の調査では集落の端に相当すると考えられるSD005が埋没する過程で、形態が異なる匙・杓子形土製品が複数廃棄された状態で出土した。これらは集落の境界で行われた祭祀行為の後の投棄であると考えられる。

今後の課題として、以下の2点があげられる。第一に木製品と瓢箪との関係、第二に瓢箪と土製品との関連、これらをより広い地域を対象として検討していきたい。

【引用・参考文献】

梅木謙一ほか　1995『福音小学校構内遺跡』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

梅木謙一ほか　1998『石井・浮穴の遺跡』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

大久保徹也　1996『中間西井坪遺跡』Ⅰ　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

大野　薫　1989「匙形土製品小考」『大阪文化財論集』　（財）大阪文化財センター

薦田耕作ほか　1987『矢ノ塚遺跡』　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

角南聡一郎　1993　「近畿地方出土の匙・杓子」『河内平野遺跡群の動態』Ⅵ　（財）大阪文化財センター

角南聡一郎　2000「瓢箪製柄杓の用途」『大篠原西遺跡』　（財）元興寺文化財研究所

田上　浩・松田重治　1999『介良遺跡』Ⅲ　岡山県教育委員会

出原恵三　1990『西分増井遺跡群発掘調査報告書』　春野町教育委員会

土井光一郎・伊藤祐三　1996『若草町遺跡』Ⅱ　（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

西尾幸則・栗田茂敏　1987『宮前川遺跡発掘調査報告書』　松山市教育委員会

西岡達哉ほか　1989『稲木遺跡』　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

西川真美ほか　2000『道ヶ谷古墳・池の奥遺跡・平田七反地遺跡』　（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

藤好史郎ほか　1990『下川津遺跡』　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

正岡睦夫　1981「愛媛県越智郡玉川町犬塚遺跡について」『古代学研究』96　古代学研究会

松山市教育委員会　1982『古代の松山平野』　松山市教育委員会

真鍋昌宏ほか　1993『郡家原遺跡』　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

森　格也　1997『鴨部・川田遺跡』Ⅰ　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

森下友子編　2000『鴨部・川田遺跡』Ⅱ　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

森田尚宏　1985『林田遺跡』　土佐山田町教育委員会

山之内志郎ほか　1993『来住廃寺遺跡』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

山本一伸ほか　1997『森広遺跡』　寒川町教育委員会